

【海外留学レポート】

世界を広げた新しい出会い

-タイでの教育インターンシップ-

New Friends in the World: Educational Internship in Thailand

千葉大学教育学部 緒形 千秋

OGATA Chiaki

(Faculty of Education, Chiba University)

キーワード：タイ留学、ツイン型学生派遣プログラム、ツインクル

はじめに

2017年8月、私は2週間のツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）に参加した。初めての海外体験となった本プログラムを通して、私はたくさんの人に支えてもらいながら貴重な経験をすることができた。本レポートでは、ツインクルプログラムの特徴について触れながら、私が学んだことを書きたいと思う。

ツインクルプログラムでの新しい出会い

ツインクルプログラムは、ASEAN 諸国の大学と千葉大学とが6月受入れ、8月派遣（前期）、10月および2月受入れ、3月派遣（後期）と時期をずらして年間5回相互に学生を派遣する双方向型の学生派遣プログラムだ。千葉大学の学生がASEAN 諸国の連携大学の学生と協力しながら、現地の学校でチューデント・ティーチャーとして科学の実験授業を行う。一方、ASEAN 諸国から千葉大学へ来た留学生は、日本の高校生との交流や日本文化体験などのアクティビティに取り組み、この活動に千葉大生が随時サポートとして参加するものである。

ツインクル活動は基本的に4名で行った。班のメンバーは私を含む教育学部生3名と工学系大学院生1名で、大学院生はもちろん、学部生もそれぞれ英語教育、理科教育、養護教諭と専攻が異なった。

初めてのツインクル活動は、6月に千葉大学に来た留学生との交流だった。外国の方と接するのはツインクルへの参加を決めてから初めてだったので、ウェルカムセレモニーの日はとても緊張した。しかし、いきなり現地に行くのではなくまず日本でASEAN 諸国の大学生と交流できたので、焦らずにコミュニケーションをとることができ、予定されていた活動外でも個人的に連絡をとったり、質問に

答えたりする仲になることができた。外国人との交流に対して漠然とした不安を抱いていたが、積極的に活動に取り組み、日本に興味を持ってくれる留学生と接して、緊張が和らいでいった。さらに渡航前の留学生との交流は、英会話や異文化コミュニケーションの自信をつけるために大いに役立ったと感じている。

留学生との交流の傍ら、現地の高校生に向けて行う実験授業の開発を進めた。私達は、自分の DNA を実験で抽出し観察する実験を主体とする「See your own DNA」の授業を開発・実践した。

4名のメンバーで、授業の内容やその教え方、英語表現など、それぞれの専門性を活かして授業開発に取り組んだ。通常の講義の合間や放課後を利用しての授業開発となったが、クラウドサービスを活用するなどして綿密な情報共有とコミュニケーションを図り、パワーポイントを用いた授業を開発した。開発した授業は数名の担当教授に見ていただき、授業としての構成や英語表現などについて指導いただいた。メンバーそれぞれの専門的知識や異なる視点、教授の指導なくしては授業を成功させることはできなかったと思う。また、班のメンバーが多彩なバックグラウンドを持っていることも非常に魅力的だった。同じ学科の友人や部活・サークルでの友人は、将来の目標や趣味が似ている「自分に近い人」が多いが、今回集まった学生は自分とは違った分野を勉強し、趣味も異なり、性格や物事に対する考え方も自分とは似ていないように思う。本プログラムを通して初めて出会った4名だったからこそ班のメンバーとの出会いは新鮮で、今まで自分の中になかった視点に触れる機会になった。外国の留学生との交流だけでなく、総合大学ならではの環境を活かして、日本人学生との交流の幅も広げることができた。

タイでの授業実践

ツインクルプログラムは、海外教育インターンシップであり学生にとっては科学実験授業が大きなウェイトを占める。前述の通り日本で開発し、タイで現地学生の協力を得ながら二つの高校で授業を実施してきた。この二回の授業を通して、私は教員としての能力養成と異文化理解についてたくさんの学びを得た。

一つ目の学びは、実際に生徒に対して授業をする難しさである。私は教育学部で勉強しているが、実際に生徒の前で授業をするのはこれが初めての経験だった。思いがけないところで生徒が実験操作に難航したり、予想しない質問が飛び出たりと、大学生相手の模擬授業以上に臨機応変に対応する力が求められた。英語での授業だったため、もちろん英語で質問され、英語で答えを返す。これが難しく、答えとして伝えたいことを頭の中で整理できても、英語でアウトプットすることに苦勞し、もどかしかった。生徒のあらゆる反応や疑問に応えるために、教師は授業内容について十二分に理解し、自分の言葉で説明できなければならないと改めて感じられ、今後も自身の能力養成のために専門の勉強を深めていかなければならないと痛感した。

二つ目は、フィードバックや反省の必要性だ。実験の手順のうち、「水を口の中に含み、ゆすいでコップの中に出す」という工程がある。初めて現地で授業を行ったとき、この工程が生徒に伝わりづらく苦労した。授業を終えてからよりわかりやすく伝えるために班で方法を検討し、絵を描いて授業で用いたパワーポイントのスライドに加えるという改善をした。その甲斐あって、二回目の授業では順調に実験が進み、手順もスムーズに生徒達に伝えることができた。私は実践と反省、改善を繰り返すことで物事を着実によくしていくことができる PDCA サイクルの効果を経験をもって学ぶことができた。これは、授業実践が一度だけでは学べなかったことだと思う。



チュラロンコン大学附属高校での実験授業



パワーポイントを用いた実験手技の説明

授業を通して触れた異文化

異文化理解についても学びを深めることができた。実験中、反応を待つ時間を利用して日本文化紹介を行った。私達のグループでは、白いうちわに生徒がそれぞれ好きな日本語を書くというアクティビティを実施した。生徒達は大変積極的に取り組み、好きな言葉の日本語訳や、自分の名前を漢字で書きたいと質問している様子も見られた。私は、この時間を通して高校生と実験とは直接関係のないことも話せたのが嬉しかった。日本が大好きで日本に留学をした経験があるという生徒の話の聞いたり、日本の特撮ヒーローが好きな生徒が描いた絵を見たりして、想像していた以上にタイの生徒が日本に興味を持ってきていることを知った。そして、そんな生徒と対照的に、自分がタイ文化についてまだまだ知識や理解が浅いことを痛感した。異文化理解とは、単にその文化について多くの知識を有しているということではなく、異文化に対して理解し受け入れようとする、タイの生徒のような姿勢そのものだと思えた。

また、実際に授業をしてみるまで、うまく英語が通じるのか、タイの生徒は慣れない実験器具を使えるのかなど、班のメンバーの不安は尽きなかった。しかし、授業をしてみて、私はタイも日本も授業に向かう姿に大きな違いはなく、そう無暗に恐れることはない気付くことができた。もちろん暮らす場所や使う言葉は違うのだが、真剣に話を聞いたり、実験が成功して嬉しそうに写真を撮ったりする姿は、特別なものではなく私達日本人と変わりなかった。違いを理解しようと歩み寄ることに加

えて、異文化を背景に持つ人にも自分と同じところがあると知ることも異文化理解だと考えるようになった。これから、国籍などの枠組みに捉われることなく、同じ人間、一個人として接するということも忘れずにいたい。



うちわに日本語を書くアクティビティ



授業後の生徒、現地学生、教員との記念撮影

ツインクルプログラムの一番の強み

私がタイでお世話になった大学生・院生には、様々な人がいた。年齢や性、国籍などの面において、日本の大学以上に多様なバックグラウンドを持つ人々に出会った。そして、どの学生もそのバックグラウンドによらず留学生グループの一員として受け入れられ、ともに生活活動していた。

私は今回が初めての留学であると同時に初めての海外体験で、渡航前は大変に緊張し、タイに行くことを恐れてさえいた。日本にいて外国の学生と話すだけでも緊張するのに、言葉も文化も違う異国の地に自分が飛び込んで2週間も過ごせるのか、とても不安に思っていた。しかし、プログラムを終えた今振り返ると、とても充実した日々が過ごせたとし、これ以上によい海外初体験はありえなかったと思う。その理由は、支えてくれた教授やツインクルオフィス、そして千葉大学とASEAN諸国の学生の存在だ。私はツインクルの一番の特徴として、現地の方々、特に自分達と同じ学生が大いに手助けしてくれることがあると思う。私が滞在したキングモンクット工科大学とチュラロンコン大学の学生は、自分達の都合もある中、毎日のようにアクティビティを手伝ってくれたり、私達を食事に連れ出してくれたりした。何より、タイでの友人として過ごしてくれたことが本当に嬉しかった。慣れない言語や生活様式に戸惑うこともあったが、タイの友人達に支えられて無事2週間過ごすことができた。現地で自分が過ごしてみることで、その心細さと助けてもらう有難さを、身をもって感じた。

タイでの経験を経てから、タイ渡航前の6月に日本を訪れた留学生について、自分なりに支援していたつもりだったがもっと積極的に関わればよかった、と反省した。異文化社会の中で過ごす不安や戸惑いを知ったことで、少しでもその気持ちを和らげるようなサポートをしていきたいと考えようになった。そのため、私達がタイから帰った2か月後、現地で案内してくれた学生が千葉大学へやってきたときは、より親身になって日本を案内しようと心がけた。10月の留学生の受入れでは、6月

時以上に積極的に留学生と関わった。一緒に時間を過ごし、日本で不自由しないよう食事や公共交通機関について支援をした。話していく中で、共通の趣味を持つ留学生にも出会い、より仲を深められた。

私はこれからも、日本を訪れた外国人や、外国にルーツを持ちながら日本で暮らす子どもなど、異文化を理由として心細い思いをしている人に対して相手を理解しようとする心を持ち、積極的に支援していきたいと思う。この気持ちは、教師として働く上でも、一市民としても必要な気持ちだ。海外渡航を不安に思っていた消極的な自分を、日本で困っている外国人を手助けしたいという自分に変わってくれたツインクルプログラムには感謝してもしきれない。



来日留学生との交流（日本料理体験）

おわりに

本レポートで書いてきたように、私のツインクルプログラムでの活動はたくさんの人に支えられました。この場を借りて改めてお礼申し上げます。本当にお世話になりました。

また、奨学金を支給し、私のプログラムへの参加を支援し貴重な機会を提供してくださった日本学生支援機構（JASSO）に感謝致します。